

## 04・非公認の日々

『03・公認の関係』から、約一か月後。

とある年の秋。十月下旬の日曜日、二十時ごろ。  
日本のとある、かなり寒い地域の政令指定都市。  
天気は雨。外の気温は十度を切った。  
もう冬の気配が近づいている。

場所は、広末家。

主人公は今、イヴの家で、一緒にゲームをしている。

……ゲームをしている？

SE1 レトロなゲームのBGM

【最初から流す】

【フェードインする形で始まる】

【0―5秒ほどまで流してセリフ】

【その後、ごく小さな音量で流す】

【▲1でSE6と切り替わる】

SE2 敵キャラクターが逃げるSE

【最初から最後まで流す】

「淡々と落ち着いているが、かなり真剣にゲームを楽しんでいる。

クールなハンターのイメージで」

先生、そっち行つたよ。お願い」

〈主人公〉

「任された！」

SE3 イヴの操作するキャラクターが、主人公の操作するキャラクターに魔法をかけてくれるSE

【最初から最後まで流す】

SE4 主人公の操作するキャラクターが、敵キャラクターを攻撃するSE

【最初から最後まで流す】

SE5 敵キャラクターが倒れるSE

【最初から最後まで流す】

この会話を聞いた人は『おそらく二人は今、最新鋭の、複雑な操作を要求するゲームをしているのだろう。これだけイヴが真剣なのだから』と思うだろう。

だが、そうではない。二人が興じているのはレトロゲームだ。

主人公が子どもの頃に、夢中になって遊んだ作品である。

「嬉しそうに。主人公が敵にとどめを刺したと確信して」

おっ」

これは主人公が『広末さんの家で一緒に過ごす上で、何か遊べるものがないだろうか……』と検討した結果、持ち込んだものだ。

当初は『おそらく広末さんが遊んだ事のないゲームのはずだ。この古さを、かえって新鮮に感じてもらえるかもしれない』と期待する反面『レトロすぎて、好みじゃないかも……』と、不安でもあった。

しかし、結果は前者となった。イヴは初めて握ったコントローラーや、ちょっと粗くはあるが可愛らしいグラフィック、そして、ハードの性能を十二分に生かした高いゲーム性に夢中になってくれた。

もともとこの作品が好きな主人公にとっては、非常に喜ばしい事である。

ところで、なぜ一緒に遊ぶものを探したかというところ……。

それは、主人公がイヴと遊びたかったからだ。

誰に頼まれたわけではなく、自主的に、イヴと楽しい時間を過ごすために、主人公はこのゲーム機とソフトを掘り起こしたのだ。

▲1 ここではSE1がフェードアウトし、SE6に切り替わる。

SE6 ゲームのステータスクリアBGM

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

【ごく小さな音量で流す】

【▲2でストップする】

「主人公と声が重なっているイメージで」  
「やったあ」

〈主人公〉

「やったー!」

かくして主人公とイヴはボスキャラを倒し、クエストは完了した。

二人は大いに盛り上がり、揃って万歳をする。

その姿はまるで、もう何年も親しくしてきた友人のようである。

実際に二人が一緒に過ごすようになったのはここ一か月ほどの間なのだが、この間で、二人はすっかり、お互い気が合う事を実感していた。

自分達であれば、お互い気を遣いすぎる事なく、かといって上下関係を無視する事もない。ごく自然体のまま、楽しく話したり、食事をしたり、遊んだりできる関係を築けるとわかったのだ。

「上機嫌で興奮気味に。しかし、それでもそこまで普段と声が変わらない」  
あー面白かった。やっとクリアできたね。

こういうゲームってやった事なかったけど、面白いね。

先生、持ってきてくれてありがとうございます」

〈主人公〉

「楽しんでいただけて何よりです」

そんな主人公は、この一か月で、イヴについて理解を深めた。

たとえば彼女は今、ものすごく喜んでくれていて、興奮している。

イヴはこの通り、あまり感情が表に出る方ではない。

しかし、その分、積極的に言葉で感情を伝えてくれる。

つまり、イヴの発言は、素直に受け止めるのが正しい。

下手に裏があるのではないかと勘繰ったり、深読みしたりしてはいけない。

イヴが『楽しい』と言っているのなら楽しいのだし『面白い』と言ったら、それがきつと本音なのである。……きつと。

SE7 オープンの音

【最初から最後まで流す】

と、そこで『チーン』とオープン機能の停止音が聞こえた。

ゲームと並行して、イヴが電子レンジでパイを焼いてくれていたのである。

「あーパイ焼けた」

〈主人公〉

「わたしが持ってくるよ。待ってて」

「あ、取ってきてくれるの？　ありがとう」

主人公、『待ってました』とばかりに立ち上がる。

先ほどからずっと、これが楽しみだったのだ。

今日訪問してすぐに『先生、パイ食べない？』と言われた時は驚いたが、もちろん食べたかった。

なんでも、スーパーに売っているパイシートで、簡単にパイが焼けるらしいので、試してみたかったのだという。

SE8　主人公が電子レンジに向かって歩いて行く足音

【最初から最後まで流す】

SE9 イヴがゲーム機の電源を落とす音

【最初から最後まで流す】

【ごく小さな音量で流す】

【遠くで聞こえる】

▲2 ここでSE4がストップする。

SE10 主人公が電子レンジの扉を開ける音

【最初から最後まで流す】

主人公、いそいそと電子レンジがあるキッチンの方まで歩いて行き、電子レンジから、焼きたての小さなパイ達を取り出す。

それから、それらを落とさないように、わくわくしながら元の場所まで運ぶ。

その間、ちよつと息を吸っただけでわかった。

食べる前からわかる。これは、絶対においしい……。

SE11 主人公がイヴのところへ戻る足音

【最初から最後まで流す】

【SE8と同じ音】

〈主人公〉

「お持ちしました！」

【嬉しい】

ありがとう。

【ちよつと得意げに。『主人公はすでに、広末家の事を熟知するほど入り浸っている』という事実が誇らしい】

ふふ。何か先生もう、すっかりうちの人って感じだね。

食器の場所も覚えちゃってるでしょ。

じゃあ、ゲームもキリいいし、食べよっか」

〈主人公〉

「うん！ 食べたい！ すっごい楽しみにしてたの」

そんな主人公を見て、イヴが笑う。

その顔はまるで、子どもを見る母親のようである。

この一か月で、主人公は、己の食い意地が張っている事も、イヴの作るご飯が大好きな事も、すっかりバレてしまった。

だからもう隠す気はないが、こんな風に微笑まれると恥ずかしい。

最近、イヴと一緒に居ると、とても楽しいのだが、妙に照れてしまう時がある……。

「【すごく嬉しい。主人公の反応が可愛い】

ふふ。そんなに楽しみにしてくれてたんだ。

【質問する。でも主人公はおそらく『両方食べたい』と言うとわかっている】  
じゃあ先生。ソーセージ入ってる奴とジャム入ってる奴、どっちがいい？」

〈主人公〉

「どっちも食べたい！」

SE12 イヴが食器を並べる音

【最初から最後まで流す】

「【声が笑っている。予想が的中したので】

はいはい。両方ね。どうぞ。

【一呼吸おいてから。子どもと一緒に食事する母親のような感じでは、いただきます」

〈主人公〉

「いただきます……」

主人公、早速一口食べて、うつとりと目を閉じる。  
想像に違わない、いや、それ以上のおいしさである。

【パイを一口食べて】

※食べているふりでOKです

むぐむぐむぐ……。

【少し間をあけてから。我ながら、品質に納得して】

うん。おいしく焼けたね」

〈主人公〉

「うん……すつごくおいしいよお……。お店で売ってるやつみたい……」

主人公、うっとりしながら何度もうなずく。

まずはソーセージ入りからいただいたが、最高すぎる。

お腹の容量が許す限り、いくらでも食べ続けたいクオリティだ。

「とても嬉しい」

先生が手伝ってくれたお陰じゃない？

【自分の技術ではなく、パイシートが凄いのだと思っている。

実際に、本当に簡単にパイが焼ける逸品だからである】

後、このパイシート、ほんとすごいんだよね。

安いし、こんなに簡単にパイが焼ける」

〈主人公〉

「そうなんだ！　はあ、うまあい……」

しかし、ここで主人公、これでは自分の気持ちが伝わっていない事に気づく。  
つい食べるのに夢中になりすぎて、相槌が適当になってしまった。これでは『主人公は  
イヴの腕ではなく、パイシートがすごいと思っている』と受け取られかねない。

今イヴが言った通り、このパイの製作には、主人公も多少かかわっている。確かに見たところ、そこまで手間はかかっていたように思う。

つまりそれだけ作業を短縮できるこのパイシートはすごい。それはわかっている。だが、主人公一人だったら、たとえ同じ材料を与えられても、このパイは焼けないだろう。

なので、補足した。

### 〈主人公〉

「でもさあ。それは広末さんが普段から料理してて、手慣れてるからだよ。

たとえば同じパイシートがあっても、わたしが作ったら、ここまで綺麗に、おいしくは仕上がらないと思う。

だからこれはやっぱり、広末さんの腕があつてのもの！

広末さんはもはや、わたしのママだね。

家庭でこんなにおいしいお菓子が食べられるなんて幸せすぎるよ」

しかし、今度は余計な事まで言ってしまったようだ。

イヴが不満げに口をとがらせる。

「不満げに。露骨に声のトーンが、可愛く下がる」

あー。また『広末さん』って言った。

「とても嬉しいが『ママ』扱いでは困ると感じている。」

※マークまで、可愛く不満を述べる」

学校じゃあしょうがないけど。『うちではイヴでいい』って言ったじゃん。

【一呼吸おいてから】

ていうか、褒めてくれるのは嬉しいけど。

それ。

毎日ご飯とかおやつとか作ってくれる人って意味で『ママみたい』って言ってるなら、そこは『お嫁さん』と言ってほしい」※

〈主人公〉

「えっ？ あっ……っ？」

主人公、動揺のあまり、危うくフォークからパイを落としそうになる。

まさか、そう来られるとは思わなかった。

だが、言われてみれば、その方がしっくりくる気がする。

だって、頻繁に相手の家に遊びに行つて、何気ないけれど充実した時間を一緒に過ごし

て。だがしかし『友達』というには、ちょっと違うような気がする関係。それって確かに、『ママみたい』というよりも……。

「**にやにやと。主人公の反応を楽しんでいる。が、割と真剣**」  
ねえ。お嫁さんにしたい？」

〈主人公〉

「えっと……」

主人公、途端に意識してしまい、返答に窮する。

もちろん、イヴは冗談で言っているのだとわかっている。

だが、それでも困ってしまったのだ。

もちろん『したい』か『したくない』かの二択でいえば、どう考えても答えは『したい』だ。イヴの家事能力は極めて高いし、何より人柄がいい。イヴのような女性となら、きつと穏やかで幸せな日々が過ごせるだろう。というか、今の主人公がとても幸せである。

だから、たとえばこれが通常の親しい友人であつたら、主人公は即答していた。

『絶対いいお嫁さんになれるよ！』なんてお決まりのフレーズを用いて、太鼓判を押す。そんな、ありがちな事をしていただろう。

でも、なぜかそれはできなかった。

それは、たとえばイヴが誰かのお嫁さんになったら、主人公はすごく淋しくなる気がしたからだ。

イヴにはいつまでもこんな風に、自分にお菓子を焼いてほしい。日々のささやかな楽しみを、自分と共有する人であってほしい。

身勝手極まりないが、そんな事を思ってしまったのだ。

……だが、そもそもなぜ、自分は、親しくなってまだ一か月ほどのイヴに、こんな事を思ってしまったのだろう。

それは、意外なほどに気が合って、年齢差を感じないほど盛り上げられるからだろうか。イヴの世話焼きで優しい所に何度も助けられたり、正直な言葉で気持ちを伝えてくれる誠実さを尊敬したりしているからだろうか。

いや、それだけではない気がしてきた……。

「あまり間を置かずにすぐ話題を変える。まるで気にしていない感じで。

本音としてはものすごく気になるが、あまりしつこくして、主人公を困らせたくはない」  
ふふふふ。冗談。

「パイを一口食べて。食事を再開することで、『これについてはもう追及しないよ』という意思を伝えている」

※食べているふりでOKです  
もぐもぐもぐ……。

【少し間をあけてから。

食べ終わってから話す。しれっと、普通に。

今気づいたような雰囲気と言っているが、前々からそう思っていた】

「あ、でも、先生をお嫁さんにしたい人はいるかも」

〈主人公〉

「ふえっ!？」

だがここで、イヴはあっさりと話題を変えてきた。

しかも、その矛先が主人公に向いた。

なので主人公はますます驚き、ますますなんと答えればいいかわからなくなる。  
すっきり、イヴに翻弄されている。

〈主人公〉

「いやいやいや、そんな事は……」

「しれっと根拠を述べる」

だって先生、私のご飯、いつもおいしいって食べてくれるし。  
私が安心して過ごせるように、色々考えてくれるし。

【イヴ的には、これが重要。

たとえば、トラック03『03・公認の関係』での、カフェラテや柔軟剤の件がとても嬉しかった】

私の好きなものは、全部覚えててくれる。

【さらっと言う】

私、先生のそういう所、大好き」

〈主人公〉

「えっ。あつ、あつ……」

頭に、先ほどの自分自身の主張が蘇る。

“イヴの発言は、素直に受け止めるのが正しい。

下手に裏があるのではないかと勘繰ったり、深読みしたりしてはいけない。

イヴが『楽しい』と言っているのなら楽しいのだし『面白い』と言ったら、それがきつ

と本音なのである。”

仮に、この考えが正しいとして。

……じゃあ、イヴが『一緒に居て楽しい』『大好き』という事は……。

「ごく自然にたたみかける。

主観ではなく、客観的にいいと思っているので照れない。

まるで友達の好きな人あるいは芸能人を、冷静にほめているような感じで。

たとえばテレビの人気歌手の歌を聞いて『この人、いい声だよね』と、誰が聞いても当たり前の事を言っているようなイメージで」

でもって、声も好き。いい声だよね」

仮説を立てる前に、さらに甘い言葉が飛んでくる。

〈主人公〉

「えっ、いや、それほどでも……」

——いい声は、広末さんの方じゃん！

なんて返す前に、さらに次がくる。

「主人公の反応を楽しみつつ、素直な気持ちを述べる。

やはり、友達の好きな人や芸能人を、冷静にほめているような感じで。

客観的に、今テレビに映っている芸能人の良い所を述べているようなイメージで」  
それから、手が綺麗」

〈主人公〉

「ど、どうもありがとう……」

さらに、これだけでは済まず……。

「声が弾んでいる。

ここから『客観的にもよいと思うし、主観的にもとても良い』という感じになってくる。  
主人公を正面から見つめて、照れなく言っているイメージで」  
顔もいい」

〈主人公〉

「いやいやいや！　その辺にいる顔だし！」

主人公、たまらなくなつて、顔の前でぶんふんと手を振る。  
それから思う。

なんでこの子は、そういう事を照れなく言うんだらう!?

だめだ！　このままじゃ、一方的にめちやくちやにされる！

広末さんってば、人をからかつて遊ぶのはやめてほしい。

いや、人をからかうような子じゃないっていうのは、わかつてるけど……。

と。

だって、まさか、こんなにべた褒めされるとは思わなかったのだ。

おかげで主人公の顔は、今、わかりやすすぎるほどに真っ赤だ。

思わず手で顔を隠すように覆ったが、これもいけない。

これでは『私は今照れています』とアピールしているようなものではないか。  
しかも、イヴはそんな主人公の顔を、にやにやと覗き込んでくる。

「照れなく、主人公の顔をじっと見ながら言っているイメージで。

『へえ？　そう？　本当にその辺に居る顔かな？　よく見せて確認させて？』という感じで」

その辺にいる顔？　そう？」

〈主人公〉

「そう！」

主人公、思う。

ほんとにその辺に居る顔なんだから、そんなにまじまじと見ないでほしい。

というか、いい声やいい顔してるのは広末さんなんだから、いい声・顔を鑑賞したいなら、自分の事を見たり聞いたりしてほしいんだけど！

と。

だが、これによって、新たな事実気づく。

先ほど主人公は『イヴの事をお嫁さんにしたいか』と聞かれて、答えられなかった。

それは『誰かのお嫁さんになってしまったら淋しい』と思ってしまったからだ。でも『イヴの容姿や声は優れている。少なくとも、自分はそう思っている』という事なら、別に言ってもいいのではないか。

……なのになぜ、主人公は、今それを言えないのだろうか。

どうしてイヴのように、素直に思っている事を言えなくなっているのだろうか。

「【にやにやと。主人公の反応が可愛くて楽しい】

じゃあ、この辺にいたのが先生でよかったなあ」

〈主人公〉

「あ、あ、あ……」

「【主人公が可愛くてたまらない】

ふふふふ。

【少し間をあけてから。またも、あっさり話題を変える】

あ。ジャムの方切れたよ。食べて食べて」

〈主人公〉

「あ、う、うん……」

しかし、またもここで話題が切り換えられてしまった。そのせいで結論を出せなかった主人公の混乱は、深まるばかりだ。せっかく切り上げてくれた話題を、蒸し返してしまう。

### 〈主人公〉

「で、でも、ほんとにモテないから。

何かいつも『思ってたのと違う』って言われるし」

主人公、とうとう、かねてからのコンプレックスまで口にしてしまう。頭の中はもうめちやくちやだ。考えが、まるでまとまらない。

ああ。な、なんでわたしは、こんな言わなくてもいい事を言っているんだ……。それなりに生きてきた大人なんだから。

『モテない』とか主張した所で、誰も得しない事位、わかってるのに。事實はどうあれ、せっかく褒めてくれてるんだから。

ここで謙遜しても、相手を困らせるだけだって知ってるのに。

……なのに、なんでこんな事してるんだろう。

最近年下の広末さんと一緒にいすぎて、自分まで若くなつた気持ちになつて、精神的に幼くなつちやつてるのかな。

それとも、ほんとにペース乱され過ぎて、普段ならしないような事しちやつてるのかな。それとも……。

「きよとんとして。自然に復唱する。

個人的には反論したいが、主人公の主張を受け入れている感じで」  
ふーん。モテないの？

「だが、こちらに関しては『なぜそう言われるのかわからない』と思っている」  
いつも『思ってたのと違う』って言われる？

「きよとんとして。怒っているのではなく『本当に謎だ』という感じで」  
何でそう思うんだろう。

「少し間をあけてから。

温かみのある声でからかう。

思いついた『思ってたのと違う』要素が、これだった」

ああ。先生ってパツと見大人の女なのに、思ったよりドジだから？」

〈主人公〉

「ひ、ひどい！」

「温かみのある声で続ける」

でも私、ちよっとボーっとしてたり、困って『えーん』ってなったりしてる先生も好きだよ。

【少し間をあけてから。

温かみのある声でくすくす笑って。トラック01『01・目を覚ましたら、ひざまくら』での出来事を思い出して】

まあ、危ないから、外で寝ちやうのはもうダメだけどね」

〈主人公〉

「……………っ……………」

主人公、真っ赤になりつつ、熱い頬からそっと手をよける。

もう隠しても無駄だ。今自分が照れていて、イヴの言葉をたまらなく嬉しく感じている事は、イヴにはもうバレバレだ。

だったらもう、開き直ってしまえ。

思う存分見るがいい、この恥ずかしがりながらも、喜びを全然隠しきれていないわたしの事を！

と、思っていると……。

「【少し間をあけてから。】

『しかし、思ってたのと違う』のは、決して悪い事ばかりではないだろうと考えている」  
でも私、そういう先生だったから言えたんだと思う。

【声のトーンが下がる。トラック02『02・真昼の逃避行』での変質者騒ぎを思い出して】  
あの時……変な人がついて来た時。

誰かに言っても、信じてもらえないかもしれないって思ったから」

〈主人公〉

「えっ？」

ここで、話が意外な方向へ転んだ。

それは聞き捨てならない。主人公、これまでの葛藤は忘れ、先ほどとは別の意味で、

むきになってしまう。

〈主人公〉

「いやいや、信じるよ。信じるでしょうよ。

生徒ってどうか、助けを求めてる人の言う事なんだから」

だが、またもイヴは同意しかねるようだ。

二人は相当に気が合うから一緒に居るはずなのだが、今日はなぜか、とことん意見が食い違っている。

「【穏やかに同意しかねる意思を示す。

『そうかな。必ずしもそうとは限らないよ』という感じで  
そうかな。

『気のせい』とか『気にしすぎ』って言われて終わりかもって、ちょっと怖かったんだよ。  
【声はいつもと変わらない。

だが、先ほどの主人公の『モテない』発言に引っ張られて、つい自分もコンプレックスを吐露してしまう。

イヴはこれまで不愛想な子だと勘違いされる事が多く、教師と親しくなった経験はない。

それどころか、仲良く話した事もほとんどない。

当然、自分の人格を受け入れてもらったと感じる事もなかった」

だって私、あんまり先生に好かれるタイプじゃないから。

【少し声のトーンが下がる。『そう言われてたら』は『気のせい、あるいは気にしすぎと言われていたら』という意味】

もし、そう言われてたら。私どうしてたんだろうな……」

〈主人公〉

「言わないよ。絶対に言わない」

主人公、強めに否定する。

らしくもなく、少し語気が荒くなっていると自覚していた。

だが仮に、イヴが『先生に好かれるタイプではない』のなら、自分はより一層、イヴの味方でいるべきだと思った。

こんな時だけ先生ぶるのはおかしいかもしれないが……とにかくそうしたかったのだ。

そんな主人公を見て、イヴが目を細める。

その時、なんだか泣きそうな顔をしているように思えたが、気のせいだろうか？

「嬉しくなり、声が少し明るくなる。

主人公なら、絶対にそう言ってくれと確信していた」

うん。『先生ならそう言う』『誰かが困ってたら、きっと助けてくれる人だ』って。今はわかるんだけどね。

あの時……もう一か月位前か。

その頃は私『もしかしたら先生に嫌われてるのかも』って思ってたから」

〈主人公〉

「えっ？　そうなの？」

主人公、驚いて身を乗り出す。

全く身に覚えがない。

嫌うも何も。約一か月前のあの日まで、主人公とイヴには全く接点などなかった。

仮にイヴがものすごく嫌な人間だったとしても、主人公には、それを知るきっかけすらなかったのである。

主人公にとってイヴは、『生徒の一人としてももちろん把握しておくが、きっと縁がないままに卒業していくだろう生徒』だった。

だからイヴにとっての主人公も、似たようなものだろうと思っていたが……過去の自分は、一体どんな悪事したのだろうか。

いや、もしかすると……。

【少しむくれて。可愛く怒る】

そうだよ。言ったじゃん。初めて話した時。

『私は先生がここに住んでる事知ってた』って。

【『おい』は、手を振るしぐさをしながら話しているイメージで】

ロビーで見つけて、手え振って『おい』ってした事もあるんだよ。

【当時は『無視されたのではないか』と不安だった。

しかし、今では主人公の人柄を知っているので『単純に気づいていなかったのではないか』と思っている。なので、イヴの推測でしかない『無視』ではなく、事実の方の『無反応』という言葉を使う】

でも、先生全然無反応だったし」

〈主人公〉

「えっ！　嘘！」

主人公、自分のぼんやり具合にうなだれる。

口では『嘘だろう』と言ったが、実際には『やはりそちらの線だったか』と感じていた。先ほど指摘された通り、主人公は普段、あまりにもボーッとしている。

あらかたその時も考え事に夢中になって、近くにイヴがいる事に気づかないまま通過してしまったのだろう。

恐ろしい話だが、このような指摘を受けたのは初めてではない。

信じられないかもしれないが、主人公はいつもそうなのだ。

世の中にはそういう、近くに知り合いがいても、とことん気づかないタイプの人間がいるのだ。

だが、それが理解されたい事も重々承知している。

これでは確かに『嫌われている』『無視されている』と受け止められても仕方ないと思った。

「先ほどはむくれたような態度を取ったが、実際は別に怒っていない。

当時は確かにシヨックだったが、主人公の手柄を知った今なら『本当に気づいていなかったのだろう』とわかるからである」

それでも私、先生がいい人なんだろうって事は知ってた。

直接話した事はなかったけど。友達から『先生に話聞いてもらった』とか『早退する時

送ってもらった』とか、聞いてたから。

【少し間をあけてから。少し声のトーンが下がる。

当時の自分の勇気のなさを思い出して】

でも、なんか話しかけられなくて……。

【声のトーンが戻る。トラック01という、楽しい出来事を思い出しているので】

だから、マンションのラウンジに先生が居た時『ちよつとチャンスかも』って思ったんだ。

【思い出し笑いして】

ふふ。そしたら先生、寝てただけど」

〈主人公〉

「そうだったんだ……」

主人公、ひとまず相槌を打つ。

反省すべき点が多すぎて、まずイヴに気づかなかった件を詫びればいいのか、ラウンジで寝ていた件を詫びればいいのかわからなくなったが……この話にはまだ続きがありそうだった。

「そうだよ？ あの時、本当はすごい勇気出したんだから。」

【ふと思い出したように。これについては、本当に今思い出した】

そうだ。先生もしかしたら知らないかもだから言うね。

うちの学校の子って、実はこのマンションにもう一人いるんだよ」

〈主人公〉

「え？ そうなの？」

と、ここで、さらなる新情報が入った。

当然、主人公は知らなかった。

わたし、普段、どれだけんやりしてるんだろう……。

と、そこそこのショックを受ける。

「『『だろうと思った』という感じで』

やっぱり知らなかったか」

〈主人公〉

「ごめん。知らなかった。ほんとにいつもブーツと歩いてるもんで……。  
どんな子？」

「【少し考えこんでから話す。実際はイヴも、相手の事をよく知らない。

『ペコってする』というのは『会釈する』という意味】

私も会ったらペコってする位で、住んでる階とかはわかんないけど……。

【『先輩』というのは『自分から見て先輩』という意味】

多分、先輩。背えちっちゃくて、肩まで位の髪の毛、可愛い感じの人」

〈主人公〉

「むむ……何人か候補がいるな」

主人公、素直に非を認めて教えを乞うたが、候補を絞りこむ事はできなかった。  
数人ほど、思い当たる女子生徒がいる。

なので、

……とりあえず、今度それらしい子を見かけたら挨拶をしよう……。

と、思っていると、イヴからもっともな指摘が入った。

「会ったらきつとわかると思うよ。その時は声かけてあげてね。

もしかしたら私みたいに、いらぬ心配をしてるかもしれないから」

〈主人公〉

「……そうだね。承知しました。必ずそのようにします」

主人公が深々と頭を下げると、イヴが楽しげに笑った。

それから『この話は終わりです』と合図をする。

「【素直に従う主人公が可愛い】

ふふ。うん。約束だよ。

【主人公がかしこまった口調になったので、イヴにもそれがうつる】  
私からは以上です」

〈主人公〉

「わかりました。じゃあ……あのね？」

なので主人公は、話題が切り替わるこのタイミングで、さらにしこまり、イヴの顔を覗き込んだ。

今の自分に反省点が多いのは承知だ。

だけど、ひとまずそれは置いておいて……。

自分からも、イヴに伝えたい事がある。

そう思ったのだ。

「優しく続きを促す。

しかし、主人公が何を言おうとしているのかは検討がつかない」  
んー？」

〈主人公〉

「わたしも、ここであなたに伝えたい事がありました」

「きよんととして、『伝えたい事』について、皆目見当がつかない」

何、改まって。先生も私に言っただけだった事があるの？」

〈主人公〉

「うん」

「優しくからかうように。しかし、内心では少し不安。

こうは言いつつも『おそらく食べ物の件ではない』と思っている」

何。もしかして、実は苦手だけど無理して食べてるおかずとかあった？」

頷くと、イヴがからかうように覗き込み返してきた。

それは極めて普段通りに見えるが、どこか不安そうにも見える。

もしかすると、イヴにはそういうところがあるのかもしれない。

本当は不安なのに、相手に気を遣うあまり、うまく伝えられない事があるのかもしれない。

思えば、カフェで会った日もそうだった。

先ほどイヴは『あの日主人公が助けてくれなかったら、詰んでいた』と言っていたが……。

もしかすると、『詰む』とまではいかずとも、周囲にうまく助けを求められず、途方に暮れてしまった事が、過去にはあったのかもしれない。

だったら主人公は、今後イヴがそうならないように助けたいと思った。  
それは、『自分がイヴの先生だから』ではなくて……。

〈主人公〉

「あのね」

「うん」

〈主人公〉

「イヴちゃんは可愛いね」

「**虚を突かれる。すごく嬉しくて、戸惑う**」

えっ……」

あ。なんかちよつと説明が足りない気がするけど、本音だからいいか。  
いいや。おいおい補足しよう。

漏れ出た言葉は、ずいぶん省略があったものの、紛れもなく本心だった。

それは一見脈絡のない発言だが、主人公の中ではちゃんとあった。だって主人公は、イヴを可愛いと思っている。

好ましく思っているし、いじらしいと感じている。

だから今後、彼女が困ってしまう事がないように。その人柄を知る者として、助けたいと思っている。

これをものすごく短く言うと『可愛いね』という言葉になったのだ。

### 〈主人公〉

「それから、優しいよね。

初めて話した時から、いい子だなあと思ってた。

あの時は『自然に人に親切にできる子なのかな』ってと思ってたけど……。

本当は勇気出してくれてたんだね。

酔っ払ってた、バカなわたしのためにありがとう」

主人公としては、普段イヴがそうしているように、単純な事実の羅列として、イヴを評価したつもりだった。

しかし、イヴは途端に照れてしまったようだ。

いつもはこちらを照れさせる事を平然と言うくせに、今はもごもごしている。

「途端に照れてしまう」

あ……。

『別に』が途切れて『べ、つに』になる」

べ、つに。大した事じゃないよ。

「この『ガーデン逢瀬』に住んでいる、もう一人の逢瀬学園の生徒について話している。

しかし相手が『先輩』という確証はない。なので、『先輩?』と疑問形になる」

先輩? の事は、前から言おうと思ってたし。

『変な所で寝てる人が居たら、誰でも心配する』は『変な所で寝てる人が居たら、誰でも心配するに決まっているでしょう?』の省略」

ラウンジでの事もそう。

変な所で寝てる人が居たら、誰でも心配する。

「少し間をあけてから。

もももごする。とても恥ずかしいので」

別に優しいとかじゃ、ないよ」

そんなイヴは、ますます可愛かった。

今は主人公が『誰でも心配する? そう? じゃあ、あの時心配してくれたのがイヴちゃ

んでよかったなあ』と言いたい気分だ。

だって、あの時イヴが主人公を見つけてくれなかったら、今の二人の関係はなかった。だから『ラウンジ』という『この辺』に居たのがイヴでよかったなあと、主人公は思うのだ。

〈主人公〉

「心配してくれただけじゃないよね。

わたしが起きるまで、膝枕して待っててくれたの、覚えてるよ」

「【ますます照れて、もじもじしてしまう】

それは……先生の日頃の行いがいいからだって。

先生がおかしな人じゃないってわかってたから。無理に起こさないで。起きるまで待ってようって思ったの。

【少し間をあけてから。とても恥ずかしい】

あのね。そんなに褒めたって、私が嬉しいだけで、何も出ないよ。

【恥ずかしくなってきた、思わずからかってしまう】

それとも何？ やっぱり嫁にしたくなかった？」

〈主人公〉

「うん。したい」

イヴが反撃してきたが、主人公はもうひるまなかった。

驚くほど素直な言葉が出る。

もはや、どう受け止められても構わない。自分が今思っている事を伝えたい。

褒められ慣れていないのか、困っているイヴはとても可愛かったし、たとえば『お嫁さん』を『ずっと一緒に居たいと思う人』と定義するのであれば、自分にとってそれは、まさにイヴだろうと思ったのだ。

「嬉しくて、声が出ない。」

先ほどまで饒舌だったのに、いざ攻め込まれると、上手く受け答えができない」  
えっ……」

〈主人公〉

「お嫁さんにしたい。イヴちゃんは素敵な人だから。」

イヴちゃんみたいな人がお嫁さんだったら、きっと幸せだろうなって思う」

「少し間をあけてから。ものすごく嬉しい。」

あからさまに照れて、しどろもどろになってしまう。

どういう意味であれ『お嫁さんにしたい』と言われた事が、とにかく嬉しい」

【嬉しくてたまらない】

そっ、か……。

【主人公の言葉が嬉しくて、語彙力が大幅にダウンしている。

その結果、同じ言葉を繰り返してしまう】

そっか……」

〈主人公〉

「そうです」

主人公が大きく頷いて微笑むと、イヴが泣きそうに目を潤ませた。  
よかった。少なくとも、不快にさせてはいないようだ。

【嬉しくて泣きそう】

ありがとう……」

7秒ほど沈黙。

二人、そのまま、もじもじと顔を見合わせる。

なんだか、思った以上にいい雰囲気だ。

だから主人公は思わずイヴの頭を撫でたり、抱きしめなくなったりしたが……『果たしてそうしてよいものだろうか』という気持ちだが、その手を止めた。

一人暮らしで心配だからとはいえ、生徒の家に友達のように入り浸っておいて、今更な気もするが……。

たとえ同性で、信頼関係があっても、教師と生徒にはどこまで許されるのかわからない。だが、主人公は思う。

じゃあ、逆に。

仮にわたしとイヴちゃんには、信頼関係があるとして。

わたしは自分達が教師と生徒じゃないなら、今、頭などでなでしたり、ハグしたり、してたのかな。

なんで、したいと思ったのかな。

それは……。

と、そこで、イヴが何かに気づいたように、テーブルの上を見た。視線の先を追うと、主人公のスマホ画面が点灯している。メッセージか何かが届いたようだ。

「【恥ずかしくなるあまり、主人公のスマホの通知に救いを求める】

あ！ 先生。何か通知来てるよ？

見たら？

明日早く来てって言われてるんでしょ。それ関係かもよ」

〈主人公〉

「あ、う、うん！」

主人公、今、ひそかに出た結論にどきまぎしつつも、イヴに従う。

時刻はもう二十一時近く、おまけに今日は日曜日だ。

明日、登校や出勤がある人なら、そろそろ明日に備える時間のような気もするが、一体誰だろう。

SE13

主人公がスマホを手取る音

【最初から最後まで流す】

そう思いながら主人公はスマホを手に取り、一度消灯してしまったそれを、再度点灯させる。

〈主人公〉

「……あ、学校からみたい」

するとそこには『逢瀬学園』という、教師間のグループチャット名が表示されていた。それは、たまにある飲み会や、その他の連絡事項の時位しか使わないもののはずなのだが…。

「きよんととして。日曜日のこんな遅い時間に連絡が来ることが不思議。この一か月主人公と沢山一緒に過ごしたが、このような事はなかった」  
学校から？」

〈主人公〉

「うん。ちょっと見ちゃうね」

あーもう、こんな時になんなんだ。

なんか大した事じゃない気がする。大した事じゃない気がするぞ。

そう。今は『こんな時』。こんな時なのに。

今すごい、大事な時なのに……！

主人公、水を差されたような気分でムスツとしたままスワイプし、内容を確認する。  
だが、そこに書かれていたのは――……。

〈主人公〉

「……………！」

主人公、目を見開き、息をのむ。

それは、とても喜ばしい事だった。

主人公が少しでも早く『そうなってほしい』と、強く願っていた事だった。

「優しく。主人公が固まっているので、少し心配になって」

先生？」

だから一刻も早く『その件』についてイヴに伝えるべきだ。それは間違いない。

「なんかあった？」

——だがそうした時、主人公とイヴは、新たな問題に直面するだろう。この一か月の間、二人は親しくなりすぎた。

いつしか当たり前のように一緒に過ごして、それが今後ずっと続くような気がしていた。

そんな奇妙な間柄に、二人はあえて名前を付けずに暮らしていたが……。

『その件』を伝える事は『二人はあくまで、教師と生徒である』と再確認させる。

そうなった時、自分達はどうなるのだろうか？

主人公は今、それが、とても怖くなってしまうていた。

「先生……？」

ここでフェードアウトして終了。